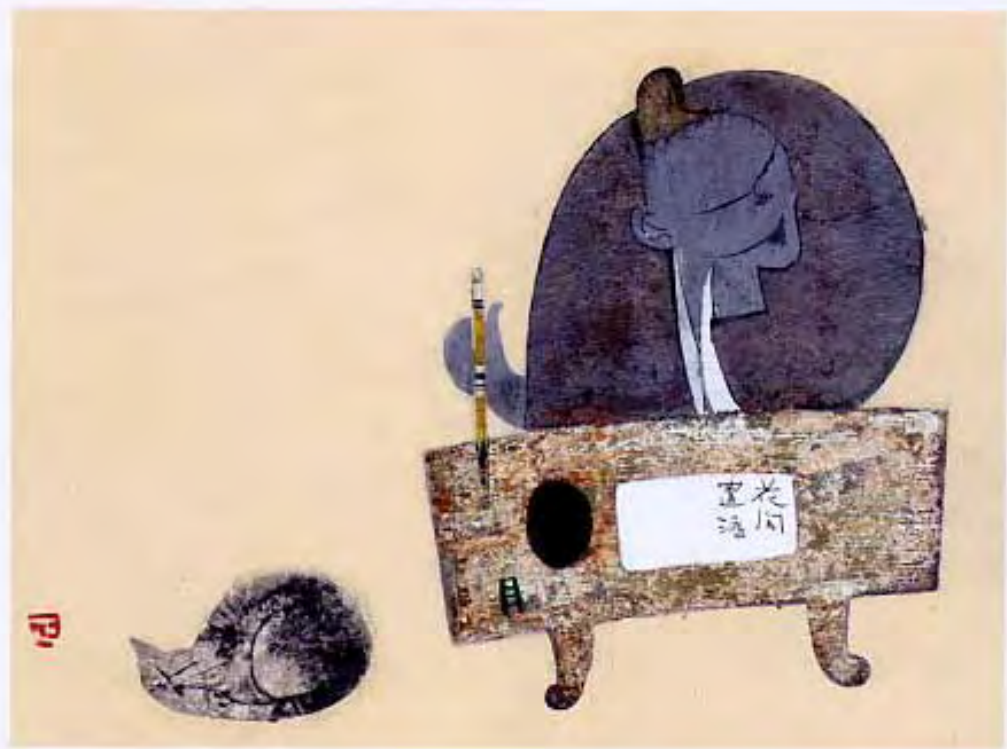


火星



平成19年6月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

花冷の陸へ差し込む舳かな

海女の蹠岬の椿へひるがへる

花ゑんどの風見えてゐる舟の上

六月の軒より現れし飛行船

我が傍に母が豌豆剥きに来し

葉桜を出で葉桜へ弓袋

雨粒のいろいろを見て牡丹寺

空也の息かかり藤房むらさきに

忌の酒を縁へもちだす桐の花

けふ梅雨に入りし近所の鳩の数

太白星

柳生千枝子

耳鳴りのして涅槃図を離れけり
若駒の未だいとけなき眼のうるみ
跳びはねて仔馬全身にて甘ゆ
永き日の波頭光れり金色に
永き日の綺麗に燃えて日が沈む
藤ほどけ水の反射の執拗な
青枇杷に硬い風吹く夜明前

杉浦典子

梅畑の石段に歩の合はぬなり
馬の鼻かるくたたきて水温む

立雛のうしろ見たくてまはしけり
春の山しばらく鋸の音たつる
楽屋入りの荷の通りけり桜の芽
水の上の駅に待ちをりつばくらめ
鳥影のふはりとゆくや落し角

浜口高子

サロマ湖の風に浮きぬる海胆の籠
風に背を押されてブロッコリー畑
熔岩小屋の裏のクローバー濡れてゐる
桜餅地震くぐりきし手塩皿
鳥交るスイマー・ターンの水しぶき
馬方の三楹の花背に挿し来
啓蟄の縁下にある物干し竿

火星作品

山尾玉藻選

雛の前またははじめから子が唄ふ
お彼岸の菜屑の煙立ち上がる
ただならぬ速さに流れ紅椿
山椿溪に落つるをあやまたず
尻高に猫のくぐりし木瓜の花
摘草や百年前の橋渡り
春の雨祇園に郵便受けあらず
白味噌のうどんを食うべ花遍路
重箱を四角く包む臍かな
丁字屋の廊のどん突き春の猫
ボート四五艇春風の砂の上
焦げ深き仏身坐せり花の雨
赤い実をつつく鳥ゐて雛飾

明石 戸栗末廣
八幡丸山照子
宝塚 山田美恵子

神獸鏡に近づけしかほ鳥雲に
紅き桶運ぶ自転車花ぐもり
花冷の指添へられし搾乳器
浅蜷籠傾かせたる次の波
銀閣をそれて椿へけもの道
振付けの声よく通る桃の花
春火鉢立ちよろけしてつかみけり
啓蟄の寺に丸太の届きけり
はんざきの穴の上流れ紅椿
鳥雲に反魂丹の古看板
いろいろの水音ひびく春館
茎立や昼より雨の本降り
名の木の芽鏃のごとくせ鬩ぎ合ひ
椿踏みたる滝道のかわきかな
水取や焼けばつくひの見事なる
つぶ和を啜れる兄に狎れずをり
茅葺の車夫の控に春火桶

神戸 深澤 鱻

豊中 松山直美

八幡 飯塚 糸子

選のあとに

山尾 玉藻

お彼岸の菜屑の煙立ち上がる

戸栗 末廣

暫くの間、畑の隅に寄せられていた菜屑であろう。枯れ切つていない為、火付きも悪く、漸く煙が立ち始めたのである。煙がゆるゆると消えて行く空にも、寒さを吹っ切った様子が窺える。「お彼岸」らしい穏やかな趣が、過不足なく描かれている句。同時発表作へ雛の前またはじめから子が唄ふも、雛祭らしい可愛げな雰囲気伝えていて、好もしく思う。

春の雨祇園に郵便受けあらず

丸山 照子

そう言われれば、祇園のお茶屋の門口に無骨な「郵便受け」を見かけた覚えがない。恐らく勝手口にあるのか、一般には気付きにくい備えがあるのであろう。このちよつとした発見に、作者は改めて「祇園」が非日常的空間であることを実感したのである。「春の雨」はいかにも祇園的であるが、日常的で瑣末なイメージの「郵便受け」を介することでバランスが保てた。

紅き桶運ぶ自転車花ぐもり

山田美恵子

この自転車はお祝いの席へ急いでいるのであろう。無論「赤き桶」には祝い酒がたつぷりと満たされている。抑えの効いた季語「花ぐもり」が、「紅き桶」の鮮やかさを一層浮び上げさせている。桜の季節ならではの佳き風景である。

振付けの声よく通る桃の花

飯塚 系子

「桃の花」と取り合わせたところからして、エアロビクスやバレエ教室の一齣ではないだろう。歌舞練場で行われている、都おどりの稽古風景などが想像できる。振付けの声の主は、背筋をぴんと張った井上流お家元か老妓であろう。「声よく通る」のよく通るに、常に気品と厳しさを忘れぬ心意気が感じられる。華やかな「桃の花」との取り合わせで、それが一層際立った。

はんざぎの穴の上流れ紅椿

松山 直美

作者は以前「はんざぎ」を見かけた川底の穴の辺りを、興味深げに眺めていたのである。そこを思いがけず「紅椿」が流れ過ぎ、穴に潜んでいるかも知れぬ「はんざぎ」への思いを一層強くした作者である。「紅椿」の紅いろと「はんざぎ」のぬめつとした漆黒いろを、読み手に鮮やかにオーバーラップさせる、秀でた構図から成る句と言える。

椿踏みたる滝道のかわきかな

深澤 鱒

溪流の音や草木の茂りを豊かに感じてこそ「滝道」の醍醐味があると云うもので、春のそれはどことなく物足りない。そんな「滝道」で作者はふと「椿」を踏んでしまったのである。靴底に椿のぼつたりとした感触を覚えた瞬間、それまでの満たされぬ思いが、確かな思いとして思わず口をついて出たのである。それが、「正しく「かわきかな」なのである。

恒星圈

飯塚 糸子

このごろの睡眠浅し桃の花
二の丸に鳩本丸へ初燕
杉箸を小さく使ふ田螺和
順々に前屈みせし河豚放生
暮れかねる時計廻りの匏屑

大山 文子

伊吹嶺の夕映えにあり春の鴨
お水取見て来し眼鏡拭ひけり
八幡の初花を来し息であり
神獸鏡蔵せる垣の赤芽かな
椿の葉闕伽の春水したたらす

加古 みちよ

ほと打ちし手窪の形に紙風船
啓蟄や水口をみづ溢れつつ
てのひらに並んで在す豆雛
沈丁を咲かせて奥に病む人よ
角落ちし頭一振りして去りぬ

米澤 光子

粗筵にほつれのありし野梅かな
げんげ田に鴉の怪訝ありにけり
梅が枝に水煙低き鬼子母神
揚ひばり紅き当て子の仏らに
兄の手に残る温もり初ざくら

馬車まはし一巡したり花の雨
比良八荒巫女の緋袴吹かれきし
大樟の幣に春風見えぬたり
待ちあはす橋のたもとの花杏
龍太逝き眉の翳りし雛かな

獅子座

山尾玉藻推薦

蘭定かず子

雲雀野に花柄蒲団捨ててある
水門の上^ミは湖さくら散る
養花天神の樂器を打ちにけり
亀鳴けり男ばかりの蕎麦打ちに

村上留美子

父留守の子を連れ出せり芹の水
松の木に光集まる春あらし
松花堂の堀の内より芽吹きたる
初蝶や竹のかぶさる通学路

竹内水穂

鳥の恋文殊の股をくぐりけり
膝づめに子ら見つめぬ雛納
味付の酒の滲むころ涅槃西風
やはらかく結んでみたる苜蓿

渡邊美保

のどぐろの喉に包丁花ぐもり
紅梅の入江小暗き波の寄せ
ふるさとや春椎茸を焼く匂ひ
ひろげある銅山絵巻涅槃西風

藤田素子

日の射せる露店のバナナ花の冷
桃咲くや七つの犬の甘え癖
白木蓮見舞に行くをためらへる
占ひを立ち読みしをり花の雨

松井倫子

鉄橋の跨ぎをりけり芽吹き山
野遊の川の向うを顔みしり
赤松（佐賀有馬藩）に通し番号風光る
日当れる梅の根元に孕み猫

天谷翔子

両岸をつなぐ飛石鳥帰る
摘草の母のだんだん遠くなる
みほとけのさみしからむと亀鳴けり
石けりの石に散りたる花の屑